



2025年8月発行

No. 19

# 日本 DMORT ニュース第 19 号



## 目次

1. 理事長あいさつ
2. 第 30 回日本災害医学会 報告
3. 世界災害救急医学会総会(WADEM 2025)参加報告
4. DMORT 養成研修 in 浜松に参加して
5. 宮城県警察における「多数遺体発生時の遺族対応」について
6. 理事ご挨拶
7. 事務局からのおしらせ

## DMORT の公式ニュースレター

### 1. 理事長あいさつ ~就任 4 か月を過ぎて~

理事長 村上 典子

DMORT が新体制となって、早 4 か月がたちました。この時期は通常は訓練や研修会もほとんどありませんので、「組織としての地固め」にあてようと、理事会で様々な課題に取り組み、まずは黒川理事と事務担当のアルバイト・木村さんを中心に、事務局体制をしっかりと確立しようとしているところです。

対外的には 4 月 25 日の JR 福知山線脱線事故の日の朝の NHK 総合テレビ「おはよう日本」で DMORT の特集を放映していただきました。当初は夕方の関西ローカルニュースのみの放送予定でしたが、急遽全国ネットでの放映となり、会員の皆さんには情報が間に合わなかった方も多いかったと思いますが、見逃し配信で見ていただいたという声も聴いております。ありがとうございました。7 月 29 日(火)には、私と山崎理事とで海上保安庁の本庁での「被害者支援研修会」の講師にお招きいただきました。

秋には訓練がたくさんあります。今まで日程がわかつてからの五月雨式の募集で、応募される方々も予定をたてにくかったかと思いますが、今回は現在日程がわかつてない分を一斉募集とさせていただきましたので、会員の皆さんにはふるってご参加ください。どうか、今後とも DMORT をよろしくお願ひいたします。

## 2. 第 30 回日本災害医学会 報告

第 30 回日本災害医学会が北川喜己会長のもと、名古屋市国際展示場（ポートメッセなごや）で R7 年 3 月 6 日～8 日に開催されました。理事でもある北川先生のご厚意にて、DMORT として、2 つの企画をさせていただきましたので報告します。

### 1) パネルディスカッション参加の報告 ~災害死亡には多面的対応が必要~

相談役 吉永 和正

学会 2 日目（3 月 7 日）に「パネルディスカッション 13 災害のこれまでとこれからを考える～遺族対応・DMORT～」が行われ、吉永、村上が座長を担当しました。

笠井武志さん（香川大学）は「地方自治体職員への DMORT 研修の必要性についての検討」という題名で行政職員としての視点から遺体対応・遺族対応・惨事ストレスはセットで研修が行なわれるべきことを報告しました。

山崎達枝さん（四天王寺大学）は、「一瞬にして家族を喪った遺族への対応～遺体安置所での活動から得た学びと今後の課題～」という題名で多くの現場経験から惨事ストレス回避にはスタッフの心理的安全性確保が重要であることを報告しました。

佐々木暁子さん（石巻赤十字病院）は「心理職の立場から東日本大震災時の黒エリア活動を追憶する－居ることの意味を考える－」という題名でこれまでほとんど知られていなかった病院での遺族対応やスタッフケアの課題を報告しました。

宇屋 貴さん（公益社）は「災害時における葬儀社視点でのご遺族対応のポイントとエンバーマーの役割」という題名で医療職では気づかない視点での遺族対応の重要性を報告しました。

いずれの発表もこれまでほとんど知られていなかった切り口であり、DMORT が関わる災害死亡にまだまだ解決すべき課題が多いことを考えさせられる内容でした。150 席の会場で立ち見が出るほどの盛況で、遺族対応・DMORT への关心がとても高まってきていました。

### 2) 企画講習会「日本 DMORT の活動の実際：講演とロールプレイ」

～ロールプレイから学ぶ家族支援と DMORT の心構え～

東京歯科大学市川総合病院 看護師 太田 真理子

今回のロールプレイは、震災による交通外傷で心肺停止状態となって病院に搬送された男性の家族に対応する看護師役でした。夫の姿を見て泣き崩れる妻の背中に手を当て、手を握りながら“一緒に居ます”という気持ちだけしていました。一方で、医師にどうにかして欲しいと訴え迫る娘の方が気がかりでした。娘の表情や言葉のトーンなどからあえて言葉かけはせず、娘の言動を注視して見守っていました。ロールプレ

イはここで終了でしたが、大変短い時間の中にも学びがありました。村上先生が講演で言っていたように、技術よりも“覚悟”をもってその家族と向き合うことができたかがDMORTに求められる役割だという意味を考え、研修を通して様々な意見を交わすことで自己の成長に繋がっていると感じました。

日々の業務から離れて研修で出会う人々との交流は、知見を広げられ、互いを尊重し合える仲間との出会いです。DMORTとして活動する機会に備え、今後も研修に参加して研鑽を積んでいきたいと思います。



### 3. 世界災害救急医学会総会(WADEM 2025)参加報告

**日本DMORTのポスター発表を行いました。～今後の方向はDMORTマインドを～**

**副理事長 久保山 一敏**

令和7(2025)年5月3日(土)～6日(火・祝)に東京、京王プラザホテルで開催されたWADEM(World Association for Disaster and Emergency Medicine)の総会に参加し、日本DMORTについてポスター発表をしてきました。この総会は隔年に世界各地で開催されており、今回は独立行政法人国立病院機構災害医療センター病院長の大友康裕先生が会長をつとめ第23回に当たります。参加者は80カ国以上から1,250名以上に上ったとアナウンスされ、各会場はさまざまな文化的背景をうかがわせる出で立ちの人たちでにぎわっていました。

私は5月5日(月・祝)に日本DMORTの沿革についてのポスター掲示を行い、会場からの質問を受けました。質問者は日本人ばかりでしたが、逆にそのことから国内での認知度と期待度がうかがえました。われわれの活動はDMATなどと比べると地味ですし、被

災地の医療チームの目に止まりにくい面があるように思います。今後は医学的エビデンスの発信も含めて災害医療コミュニティーにより広くアピールし、DMORT マインドがさらに広まっていくことを目指すべきだと感じました。

## 4. DMORT 養成研修 in 浜松に参加して

### ～被支援者の立場で考える遺族ケア～

浜松医科大学医学部附属病院 看護師 夏目 紗海

これまでの災害医療に関する研修では、赤・黄・緑タグの患者へ目が向いていた私にとって、今回の研修は“黒タグ患者”的存在を見つめ直し、視野が一新される内容でした。特に印象に残ったのは、ロールプレイで「夫を亡くした妻」を演じた場面です。義父から、息子(夫)を失った怒りの矛先が妻である私に向けられ、喪失感や自責の念だけでなく、疑心暗鬼になる感情までが複雑に入り混じる状況を体験し、そのなかで DMORT の寄り添いによる心の和らぎを実感しました。一方で、義父の憤りを受容することに心を費やさざるを得ず、夫の死と静かに向き合うことが難しく感じました。もし自身が DMORT の立場だった際には、妻の心情を考慮して義父と別々に面会を設定することができれば、妻はより夫の死を整理することができたのではないかと思います。今回は終了の合図とともに平常心に戻ることができますが、実災害では、果てしない悲嘆と苦痛が家族のなかで途切れることなく続くことを考え、胸が締め付けられました。

グループワークでは、支援者側の意見も聞き、被災者の悲嘆に向き合うことは支援者自身の心に負担がかかるなどを改めて認識しました。グループメンバーの心理士や看護師、行政関係者など、自身とは異なる専門的背景を持つ方々と意見交換をし、セルフケアやチーム内での支え合いの重要性にも触れることができました。

全体を通じ、遺族支援には精神的な寄り添いに加えて、環境整備や情報提供など、個々のニーズに応じた対応が求められることを学びました。被支援者の立場になったことで、これまでの災害医療に関する研修とは違った視点で、より深く考えることに繋がり、多角的な視点や新たな知見を



写真2 DMORT 養成研修 in 浜松 参加者

得る貴重な機会となりました。末筆ではございますが、研修を通して多方面にわたりご尽力くださったスタッフの皆様に深く感謝いたします。今後は今回の学びを礎に、平時からの準備や連携を重

ね、現場で真に被災者に寄り添える支援者として努めたいと思います。

## 5. 宮城県警察における「多数遺体発生時の遺族対応」

### について ~DMORT の活動報告とロールプレイを担当して~

**理事 京都第一赤十字病院 看護師 河野 智子**

令和7年4月24日(木)午後2時10分より5時00分まで、宮城県名取市内宮城県警察学校において、警察署及び高速道路交通警察隊、犯罪被害者支援を担当される20名の職員対象の研修内で、日本DMORTの活動報告をさせていただきました。この研修は、犯罪被害者支援に従事する警察職員に対し、犯罪被害者等の心情を理解させ、捜査過程における犯罪被害者等への二次的被害防止等を図るための知識、技能を習得させることを目的とされています。宮城県では、東日本大震災での被災経験もあり、今回受講されておられる警察官の中にも、複数名被災に遭われた方や被災者支援の職務に当たられた方もおられ、とても緊張した時間となりました。

座学のあと、4Gに分かれ、地震想定2事例(家族自ら探して遺体安置所に来られる事案と警察から連絡を受けて遺体安置所に来られる事案)をご家族の反応を変えて受付からご遺体との対面の場面でのロールプレイを行いました。亡くなつておられることを告知する場面の対応の困難さやそれに携わる警察官のストレスを疑似体験され、中には解離状態にあるご家族になかなかお声をかけることができず、振り返りでは「解離状態で立ち尽くすご家族が爆弾のように感じた」と話される方もおられました。また、東日本大震災当時の経験談を話してください、過酷な現場の状況も疑似体験させていただきました。私自身も、ロールプレイでの疑似体験が、実際の現場で活かされたことをお伝えし、遺体安置所という過酷な現場で、DMORTと協働が叶うなら、受けるストレスも苦痛も分かち合い、より良い被害者支援をともに考えることができるのではないかと、日本DMORTとの事前協定のアピールもしてまいりました。

このような貴重な機会を与えていただいた宮城県警様に感謝いたします。

## 6. 理事ご挨拶

### DMORT の活動 ~環状島理論を通して~

**理事 龍谷大学短期大学部 黒川 雅代子**

このたび、事務局と教育研修委員会の担当理事をさせていただくことになりました。グリーフやあいまいな喪失について研究・実践しています。また、看護師として救命救急センターでの勤務経験があります。

さて、DMORTの活動を、宮地尚子先生の環状島の理論で考えてみたいと思います。大海原にあるドーナツ型をしている孤島が環状島です。トラウマごとに環状島は形成される

そうです。環状島は尾根を境に、島の内斜面は当事者、外斜面は非当事者、内海は死者、犠牲者の沈んだ領域だと説明されています。

DMORT の活動は、外海から環状島の外斜面に上陸し、災害によって内海に沈んだ死者や内斜面にかろうじている家族の尊厳を守るために、尾根に向かって外斜面を登っていく支援者だと考えています。

多くの支援者の活動を支える役割を事務局として担えたらと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

参考文献：宮地尚子編（2021）『環状島へようこそ トラウマのポリフォニー』日本評論社

## 7. 事務局からのお知らせ

- ◆ 当法人の会計年度は1～12月ですので、2025年度の会費がまだの方は会費納入を宜しくお願いします。ご自身が会費納入をしているか不明の方は事務局までお問い合わせください。
- ◆ 振込みルールについて：送金者のフルネーム表示でお送り下さい。

〈振込先〉

・ゆうちょ銀行 記号:14210 番号:05526671 名前:シャニホンティモート

・他金融機関から振り込む場合 店名:四二八(読み ヨンニハチ) 店番:428

預金種目:普通預金 口座番号:0552667

- ◆ 2025年度会員情報

理事 9人、正会員 22人、登録会員 170人、賛助会員 3団体

- ◆ 理事名簿

理事長 村上典子(神戸赤十字病院)・副理事長 久保山一敏(医療法人 朋愛会)  
理事 北川喜己(名古屋掖済会病院)愛知県支部長・黒川雅代子(龍谷大学短期大学部)・京都府支部長・河野智子(京都第一赤十字病院)・久保勝俊(愛知学院大学)・主田英之(徳島大学)・野口理恵子(横浜市病院協会)・山崎達枝(千葉科学大学)

名誉会員・相談役 吉永和正(医療法人協和会)

監事・相談役 長崎 靖(兵庫県監察医務室)

### 【事務局所在地】

住所：〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-15-1 協和マリナホスピタル内

電話：0798-32-1112(代) FAX：0798-32-1222

E-mail: [information@dmort.jp](mailto:information@dmort.jp) 日本DMORTホームページ <http://dmort.jp>

◆編集後記◆例年以上の猛暑が続き、否が応でも地球温暖化を意識せざるを得ません。会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。ご自愛くださいませ。 編集担当:山崎・矢野